

パリの冬は、涼の中での生活を楽しむ季節でもあります。最近の私は料理に夢中。食材をいいねいに料理し、テーマに沿ってテーブルをしつらえ、花を飾り、ときには、親しい人々を招く。そんなとき、マルシェ(市場)は欠かせません。有機栽培の野菜はモスろん、肉も魚も、とれたたて新鮮なものが手に入ります。今日のように晴れた日のマルシェは、最高に気持ちが良い、色とりどりの野菜棚に、花屋の緑。鳥の声とともに、音楽が聴こえてくるようです。

ふと、昨年の夏の思い出がよぎります。ラ・ロック・ダンテロンの野外音楽祭で、メシアンの新発表作品《ヴァイオリンとピアノのための幻想曲》の初演を果たした、私にとって記念すべき夏。メシアン未亡人で優れたピアニストでもあるイヴ・オヌヌ・ロリオ先生に、その大役を託された喜びが蘇ります。音楽祭のステージは自然の真っ口中にあり、南仏の太陽が照りつける日中にピアノを出しておくことはできず、鳥たちがにぎやかに歌う早朝に練習して、一旦ピアノをしまい、日暮れからがコンサートに。まだまだ鳥はさわめいていたのに、初演作品の演奏を始めた瞬間、鳥たちが敬意を表したかのような静寂が訪れたのです。私は、音楽と自然が一体になることのすごさに震えるほど感動！

来年3月の日本でのリサイタルでは、フランスの色彩とともに、メシアンの哲学や信仰、また彼が愛した自然の美しさ—明るい陽の光や鳥のさえずりを伝えたいです。

Artist Diary

パリのマルシェで 11月22日木曜日

文＝児玉 桃

イラスト＝山本 夢

